

NPO法人SOHOシンクタンク

代表理事 久保 京子さん

事業内容

SOHO (Small Office Home Office) の実態を調査して産学官の関係者に情報を発信するとともに、SOHOを中心とする会員にメールマガジンやコミュニティサイトを通じた支援情報提供を手がける。SOHO会員約360人が登録している。

<http://www.so-ho.gr.jp/> (NPO法人SOHOシンクタンク)

<http://www.s-biz.org/> (スモールビズ・ネット)

ポイント

- ・客観的・中立的な立場から、社会とSOHOとの情報のパイプラインとなる
- ・SOHOとして自立したいという意欲のある人の、実績づくりの場を提供

I マーケティングの発想から生まれた、新しい形のSOHO支援団体

久保さんは、1998年、起業家ネットワークで知り合った人と共に、ウェブマーケティングを行う会社を立ち上げた。立ち上げ当時、4社程度の共有オフィスに入居していたことから、SOHOスタイルで働く人へのバーチャルオフィス支援サービスが出来ないかと、起業家ネットワークメンバーで話合った。そこでのディスカッションの中から、同年10月に発足したが、SOHOシンクタンクである。

この発想の源泉は、久保さんの、起業するまでの経歴にある。大学卒業後、家庭用品メーカーの調査部で、消費者の視点で製品を企画・開発するために消費者のニーズを調べるマーケティング・リサーチに携わった。その後移った住宅設備メーカーでも、製品企画や販売戦略の立案などに携わった。

当時、SOHOには一定の注目が集まっていたものの、その実態はよく知られていなかった。そこで、久保さんがそれまでに得たマーケティング・リサーチの経験を生かし、SOHOについて、企業、行政、学術関係者のパイプラインになれないかと考えた。つまり、SOHOのことをきちんと把握して、それを広く伝えるとともに、SOHOを取り巻く人たちの考えを引き出し、SOHOというワークスタイルを確立していけるようSOHOワーカーたちにフィードバックしていく活動である。

1998年当時、既にいろいろなSOHO関連の団体が設立されていたが、その多くは、SOHOの代表として発言していた。一方、同団体は、客観的・中立的立場でSOHOを捉える団体を目指しており、既存の団体とは異なる視点を持っていた。

同団体は、設立当初は任意団体であったが、2002年にNPO法人の認証を取得した。SOHOを始めるとき、アピールに使えるような実績がなくては最初の仕事を得ることが難しいため、同団体の仕事をしたことをアピールに使ってもらおうと考えた。その際、団体が法人格を持っている方が信用力が高く、よりアピール効果が大きいと考えたことがきっかけである。

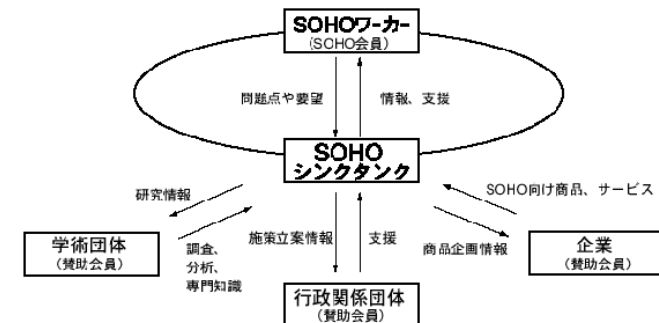
II 「SOHOについての情報」と「SOHOが活かせる情報」の循環を促進

同団体では、SOHOに関する情報発信として、3つの活動を主にやっている。

1つ目は、SOHOを対象とした企業、団体、行政のアンケート調査である。毎年、個人情報保護法の影響、起業支援など、テーマを決めて行っている。2001年と2002年には、『SOHO白書』を出版した。SOHOワーカーへのアンケートなどによりSOHOの実態を調査したもので、新聞などにも取り上げられた。

2つ目は、SOHOやフリーランスが集まる「Small-Biz.net (スモールビズネット)」という登録制のコミュニティサイトの運営である。

3つ目は、1998年の設立当初から続けているメルマガの発行である。SOHOに関連するニュースやコラム、役立つサイトの紹介、イベント、セミナー情報などを掲載しており、通巻200号を越えた。現在では、同団体設立当初に比べ、公的セミナーをはじめ、様々な支援情報があるものの、自分で情報にたどり着けない人もいるので、メルマガがきっかけ作りになることを望んでいる。



(画像提供: NPO法人SOHOシンクタンク)

III 意欲ある人がプロフェッショナルになる一歩をを助けたい

現在、SOHOシンクタンクには、SOHO会員が約360人、スモールビズネットに約400人の会員がいる。同団体は、これらの会員から同団体へのフィードバックを更に進めたいと考えている。その手段として久保さんが考えているものが、SNSである。SOHOワーカーとのコミュニケーション、SOHOワーカーの声を聞くことで、同団体からの一方的な情報提供ではなく、どんな支援が必要かが見えてくると期待している。

また、同団体では、SOHOワーカーが企業で経験を積めるよう、インターンシップの橋渡しもやっていきたいと考えている。例えば、独学でプログラミング技術を学んだものの事業の経験がない人であっても、インターンシップなら、教えてもらいながら経験を積みむことができ、しかも失敗しても痛手が少ないからだ。

久保さんは、最初からプロフェッショナルの人はいないので、意欲のある人がプロになるためのちょっとしたステップを同団体が用意していきたいと考えている。